

いつか思い出の向日葵のように

登場人物

松岡美咲	(17)	(12)	高校2年生
一ノ瀬ハル	(17)	(12)	高校2年生
松岡香織	(42)	美咲の母	
松岡優作	(44)	美咲の父	
渡辺奈央	(16)	美咲のクラスメイト	
大橋美由紀	(17)	〃	
中野	(17)	〃	
井上	(17)	〃	
一ノ瀬ふみ	(75)	ハルの祖父	
一ノ瀬加奈	(7)	ハルの妹	
池田綾香	(46)	優作の姉	
高木泰典	(51)	神主	
坂本幸子	(58)	小学校教師	
原口	(12)	美咲の小学校の同級生	
山本	(12)	〃	

○回想・一ノ瀬家・居間

一ノ瀬ハル（12）と松岡美咲（12）、
縁側に座り、庭の向日葵を見ている。

ハル「向日葵って太陽に向かって真っすぐ伸びるんだって。周りとは比べることなく、太陽だけ見て育っていくんだ」

美咲、向日葵を見ている。

ハル「大人になると見なきゃいけないものが増えて、本当に大切なものが分からなくなる。だから向日葵みたいに真っ直ぐ上を向いてれば、大事なものを見失わずにすむ。

ばあちゃんがそう言った」

美咲「私も向日葵みたいになれるかな？」

ハル「美咲がなりたいてって思うんだろ。だって
たらないよ」

ふみの声「ハル！」

ハル「ヤベ！ばあちゃん手伝う約束してたんだ」

ハル、立ち上がり去って行く。

美咲、向日葵を見ている。

タイトル「いつか思い出の向日葵のように」

○街並み（朝）

蝉の声が鳴り響く。

タワーマンションがいくつか並んでおり、夏の日差しが街を照らしている。

○マンション・松岡家・玄関（朝）

美咲（17）靴を履いている。

松岡香織（42）と松岡優作（44）が後ろに立っている。

美咲、靴を履き終わり立ち上がる。

優作「ごめんね美咲、また学校変わることに
なつて。夏休み前に転校は嫌だったよね」

美咲「いいよ、仕事でしょ」

香織「美咲、クラスの子に何か聞かれたら、
うちのお母さんは湖に咲いた一輪の花のよ
うに優雅で端麗な貴婦人って答えるのよ」

優作「自分で言わないで」

美咲、ドアを開ける。

香織「じゃあ頑張つて」

美咲、出て行く。

優作「今回は大丈夫かな」

香織「なんとかなるでしょ」

優作「だといいいんだけど」

○貝塚高校・2年2組（朝）

鈴木（31）が教卓に立っている。

隣には美咲。

渡辺奈央（16）大橋美由紀（17）

中野（17）井上（16）その他の生

徒たちが美咲を見ている。

鈴木「今日からうちのクラスに入る松岡美咲。

みんな仲良くするように。じゃあ挨拶して」

美咲「ども」

沈黙する一同。

鈴木「えっと・・・とりあえず空いてる席座つて」

美咲、席に移動しようとするが空席が2つあり立ち止まる。

鈴木「ああごめん。あっち」

鈴木、片方の空席を指す。

美咲、指された席に座る。

鈴木「来年から受験が始まるけど、今の時期が一番大切だからな。まだ1年半あるからって気をぬいてると絶対後悔するぞ」

美咲、もう1つの空席を見てる。

× × ×

黒板には年号などが書いてあり、教師が教科書を読みながら説明している。

美咲、うたた寝している。

渡辺、ノートをとっていると後頭部に丸められた紙が飛んできてる。

大橋、中野、井上が笑っている。

渡辺、俯く。

× × ×

昼休みの教室。

生徒たちが話していたりで騒がしい。

美咲、弁当を鞆から取り出し席から立ち上がるうとすると、数人の生徒が駆

け寄ってくる。

内藤 「ねえ、松岡さんてどこから来たの？」

美咲 「青森」

沢田 「部活は入ってた？」

美咲 「部活に入ったら負けだと思ってる」

田辺 「・・・じゃあ、進路とか決まってる？」

美咲 「うちのお母さんは湖に咲いた一輪の花のように優雅で端麗な貴婦人」

沢田 「どういうこと？」

と、話してると

大橋の声 「渡辺」

一同、声のする方へ視線を移すと、渡辺の席に大橋、中野、井上がやってきて、一緒に教室を出て行く。

内藤 「まただ」

沢田 「可哀想だね渡辺さん。この間もせびられてたよ」

内藤 「無暗に人なんか助けるからだよ」

美咲、弁当箱を持って教室を出て行く。

内藤 「松岡さん」

○同・屋上前の踊り場

大橋、中野、井上が渡辺を囲んでいる。

大橋「明日ね、大学生と合コンなの。でもー、着ていくお洋服が無くて困ってるの。買いに行きたいんだけどお金がなくて・・・分かるよね？」

渡辺「ごめんなさい。私もあまりなくて」

大橋「家帰って親から借りてきなよ」

渡辺「それは出来ない」

中野「じゃあさ、財布からこっそり抜いて持ってきてよ。絶対ばれないって」

渡辺「・・・」

井上「2万あれば足りるからさ、今から帰って取りに・・・」

美咲、階段を上がってくる。

美咲「邪魔」

大橋「私たちが使ってるの。他行って」

美咲、座って弁当の蓋を開ける。

大橋「（舌打ちして）行くよ」

大橋、中野、井上、渡辺、階段を下り

ていく。

美咲 「ねえ」

渡辺たち振り返る。

美咲 「クラスの子が呼んでたよ」

渡辺 「誰？」

美咲 「目が2つあって、その下に鼻がついて、口がある奴」

渡辺 「みんなあるけど・・・」

美咲 「じゃあついて来て」

美咲、弁当を持って階段を下りていく。

渡辺、美咲を見てる。

美咲 「早く」

渡辺 「うん」

渡辺、美咲について行く。

大橋 「ちよっと待てよ」

渡辺、立ち止まる。

美咲 「うるさいハゲ」

大橋 「ハゲてねーし」

美咲 「行こ」

美咲と渡辺、階段を下りて行く。

大橋「何あいつ」

○同・校庭

美咲と渡辺、ベンチに座ってる。

美咲、弁当を食べてる。

渡辺「ありがとう。でも次からは助けなくて大丈夫だから」

美咲、渡辺を見る。

渡辺「松岡さんも目つけられるし。あと1年半耐えればいいだけだから」

美咲「先生とか知らないの？」

渡辺「前は他の子が標的になってて、それで私が先生に言ったの。でも言ったことがバレて、それから私が標的になった」

美咲「・・・」

渡辺「結局その子は学校に来なくなった。だから私で止めないとダメだと思ったの。先生に言ったら次は違う誰かがいじめられる。私が耐えればこの連鎖は終わるから」

美咲「・・・」

渡辺、立ち上がる。

渡辺「ありがとね、嬉しかった」

渡辺、去って行く。

○松岡家・リビング（夜）

美咲、香織、優作、食卓を囲む。

香織「学校どうだった？」

美咲「普通」

香織「普通って何よ。もつとあるでしょ。父親がダークサイドに落ちて、黒いマスク被ってるとか、隣の子が突如消えて黒い球体に呼ばれるとか」

優作「ないよそんな学校」

香織「でも友達は作りなよ。学校が楽しくなくなるから」

美咲、立ち上がりリビングを出て行く。

優作、不安そうな表情。

○同・美咲の部屋（夜）

美咲、写真を見てる。

写真には幼い頃の美咲とハルが写っている。

○貝塚高校・廊下（朝）

生徒たちが登校している。

美咲、歩いていると教室から大橋、中野、井上、渡辺が出てくる。

大橋「ちゃんと持ってきた？」

渡辺、頷く。

美咲、渡辺の所へ向かい腕を掴む。

美咲「渡さなくていいよ」

大橋「またお前かよ」

大橋、美咲に詰め寄る。

大橋「調子乗るなよ。次はお前だからな」

美咲「勝手にすれば」

大橋「だったら・・・」

渡辺「大丈夫だから。行こう大橋さん」

大橋「しやしやり出んな」

渡辺たちが去って行く。

美咲、渡辺の後姿を見てる。

○同・2年2組

鈴木の話を生徒たちが聞いている。

鈴木「明日から夏休みだけど、あんまり羽目を外し過ぎないように。それと宿題は早めに終わらせてから遊ぶこと。最後の日に初めるとかは・・・」

チャイムが鳴る。

内藤「よし帰るか」

生徒たちが帰る準備を始める。

鈴木「まだ終わってないだろ」

沢田「チャイムが鳴ったら終わりの合図」

鈴木「あんな」

渡辺「先生・・・」

鈴木「どうした？」

渡辺「日誌が・・・」

鈴木「ああ、悪い。今取ってくる」

鈴木、教室から出て行く。

渡辺、黒板消しを取り黒板に書かれた文字を消し始める。

美咲、渡辺を見ていると大きな笑い声

が耳に入ってくる。

声の方に視線を移すと、大橋が笑いながら中野、井上と話している。

大橋「マジやばくない！てかそれ、ちよーウケるんですけど」

大橋、ふと黒板の方を見ると渡辺が視界に入る。

立ち上がり渡辺に近づいていく。

大橋「手伝ってあげるよ」

渡辺が振り返ると、黒板消しを奪い取り、渡辺の制服に擦りつける。

渡辺「え？」

大橋「制服が汚れてるから」

中野と井上、笑っている。

大橋「落ちないな」

渡辺、何も出来ず立ちすくんでいる。

周りの生徒は見て見ぬふり。

その様子を見ていた美咲が大橋の所に歩いていく。

大橋「いくらやってもダメだ。あっ、そっか。

渡辺さんて下水道に住んでるだけ。だからこんな汚れてるんだ。ほんと可哀そ・・・」

美咲、大橋に蹴りをいれる。

大橋の顔が黒板に打ち付けられ、その場にしゃがみ込む。

教室は静まり返り、周りの生徒は呆然としている。

大橋、顔を上げ美咲を見る。

大橋「お前ふざけんなよ。鼻が曲がったらどうすんだよ」

美咲「鼻なんか曲げちまえ。それよりもその歪んだ性格真っ直ぐにしろ」

大橋「お前にとやかく言われる筋合い無いんだよ」

美咲「じゃあ言われる前に自分が何やってるか理解しなよ」

大橋「うるせーな」
大橋、美咲に掴みかかり揉み合いになる。

教室の中央までいくと、美咲が大橋を

投げ飛ばす。

机や椅子が散乱する。

大橋「てめえ」

と、美咲の制服を掴み投げ返す。

廊下の外にはギャラリーが出来始める。

美咲、立ち上がると大橋に向かって行

き、襟元を掴み再び揉み合いになる。

すると、慌てた様子で鈴木が教室に入

ってくる。

鈴木「何やってんだお前ら」

○同・応接室

美咲と鈴木、向かい合わせで座っている。

鈴木「わざわざ蹴らなくてもいいだろ。大橋

ももうしないって泣いてたし、最初から先

生に言っとけば揉め事にならなかつたろ」

美咲「前にもやってたんでしょ？」

鈴木「今度は本気で反省してるから大丈夫だろ」

美咲、鈴木を睨む。

鈴木「何だ？」

美咲「別に」

扉が開き慌てた様子の香織が入ってくる。

香織「すいません遅くなって」

香織、美咲に近づいていく。

香織「あんた、何やってんの！転校してきたばっかで」

香織、鈴木に頭を下げ

香織「本当に申し訳ありません」

鈴木「とりあえずお掛け下さい」

香織、美咲の隣に座る。

香織「クラスの子と喧嘩したって」

鈴木「ええ、その時に相手の子を蹴ってしまいましたして」

香織「蹴り？」

鈴木「はい」

香織「足は出すなっかっていつも言ってるでしょ！そういう時は手でいきなさい」

鈴木「そういう事じゃなくて」

香織「まず腹に一発入れて、相手の腕が下がったところでアゴに・・・」

鈴木「松岡さん、その辺で」

香織「ごめんなさい。私ったら」

鈴木、苦笑いする。

香織「美咲、何で喧嘩したの？」

鈴木「相手の子が黒板消しを制服に擦りつけてたみたいで」

香織、美咲の制服を見る。

鈴木「娘さんではなく、他の生徒に」

香織「他の生徒？」

美咲、立ち上がり部屋を出て行こうとする。

香織「まだ終わってないでしょ」

美咲「大人と話したところで何も変わらないから」

美咲、部屋を出る。

香織「ちよつと美咲」

○同・下駄箱

渡辺、靴を履き替えている。

大橋の声「渡辺さん」

振り返ると大橋がやってくる。

大橋「さつきはごめんなさい。今までやってきたことが間違いだったって気づいたの。これからは心を入れ替える」

渡辺、大橋を見てる。

大橋「だからね、夏休みが明けたら徹底的にあんたとあいつ追いつめてやるの。もう2度と学校行きたくないってくらいにいいじめ、逆らえなくするんだ。私のやり方が甘かったんだよね。ごめんね中途半端にいいじめ。でも次からは立ち直れなくなるまでとことんやるから」

そこに美咲がやってくる。

美咲「何やってんの」

大橋「謝ってたの。これからは仲良くしようねって。ね？」

渡辺「・・・(頷く)」

大橋、靴を履き替え

大橋「じゃあまたね。夏休みが明けるの楽しみだね」

大橋、立ち去る。

美咲、渡辺を見ると俯いている。

美咲「何言われたの？」

渡辺「ごめんね松岡さん」

美咲「私はいいよ、そっちこそ大丈夫？」

渡辺「明日から夏休みだし、学校もしばらく来なくて大丈夫だから、少しは気分転換になると思うの。そしたらまた普通に・・・」

渡辺、涙がこぼれる。

渡辺「やっぱり無理だよ。あと一年半も耐えられない。何でこんなに弱いんだろ。取り繕って平気な顔して、でも見えない所はもうボロボロで、本当は学校なんて行きたくない。誰かの顔を見るのも嫌。人のこと何ともう考えられない。自分のことだけで精一杯だよ。でも逃げるところなんてどこにもない。この狭い世界の中で、私の居場所

はどこにあるの？」

美咲「・・・」

渡辺「もう心が折れちゃった・・・ごめんね」

渡辺、立ち去る。

美咲、立ちすくむ。

○たこ焼き屋

美咲、店の前にあるベンチに座り、遠くを見つめながらたこ焼きを食べている。

美咲M「ハル、やっぱり私には無理だよ」

美咲を見ている店主。店の中から出て来て、美咲の隣に座る。

店主「どうした、ねーちゃん。元気なさそうじゃねーか。まだ若いんだからもっと人生楽しまねーと」

美咲「うるせー、じじい」

店主「誰がじじいだ。お前が元気なさそーだから励ましてやってんのに」

美咲「女子高生の心はな、じじいじゃ癒せな

いんだよ」

店主「返せ」

店主、美咲からたこ焼きを奪い取る。

美咲「私のだろ」

美咲、たこ焼きを奪い返す。

店主「うちのたこ焼きはな、心が綺麗じゃな
いと食べられないんだよ」

店主、再びたこ焼きを奪い取る。

美咲「そんなたこ焼きあるか。そもそも大し
てうまくないんだよ」

店主「お前にたこ焼きの何が分かるんだよ」

美咲「分かるわ。どれだけ本場のたこ焼き食
ってきたか」

店主「本場ってどこだよ？」

美咲「・・青森」

店主「普通大阪だろ。りんごの聖地じゃねー
か」

美咲「じゃあ、大阪のたこ焼き食ったことあ
んのかよ」

店主「そりゃ、あるさかい。こちらら大阪で

修業したんやで」

美咲「急に関西弁使うなや。大阪ぶるんちやうで」

店主「お前もつこうとるさかい。大阪舐めたらいかんぜよ」

美咲「わては、本場でたこ焼き食べたじゃけー。自然と出てくるべ」

店主「お前の本場は青森じゃろ。なんくるないさー」

美咲「向こうも関西弁やけん。サーターアンダギー」

店主「んなわけないだろ。てかサーターアンダギー食いもんだからな」

美咲「知ってるわ。おっさんを試したん・・」

店主、美咲の後ろに視線をやっている。

美咲、それに気づき振り返ると、香織が立っている。

香織「あんた、何やってんの？」

○松岡家・リビング（夜）

香織と優作、向かい合わせに座っている。

優作「また喧嘩しちやっただんだ・・・」

香織「前はあんなことなかったのに。中学上がってからはだよね？美咲が変わっちゃたの」

優作「中学で何かあったのかな・・・」

香織「学校のこととか何も喋ってくれないからあの子。でもさ、一時期よく話してくれてたよね？」

優作「小学生の時だよ」

香織「ハル君に会ってから笑うようになった。

いつも悲しい顔してたあの子が、楽しそうに帰って来て、ハル君と遊んだこと夢中で喋るの。また笑ってくれないかな・・・」

優作「行ってみようか？」

香織「ハル君のところ？」

優作「うん。子供の世界って家庭と学校が大部分を占めてるでしょ。みんな色んなもの背負って歩いてる。そこでつまずくと中々立ち上がれない。今僕たちがするべきこと

は、外の世界を見せてあげることなんだと
思う。ハル君に会えば美咲も変わるかも
しれない」

香織「そうだね。行ってみよう」

優作「向こうに行ったら、姉さんの所に泊め
てもらおうか」

香織「香織さんと会うの久しぶり！なんか持
ってた方がいいよね？」

優作「大丈夫。何も要らないよ」

香織「泊めてもらうんだもん。何か持ってか
なくちゃ」

香織、キッチンの方に向かう。

優作「いいのに」

○同・美咲の部屋（夜）

美咲、ベッドの中で写真を眺めている。
写真には幼い頃の美咲とハルが写って
る。

と、ドアがノックされる。

優作の声「起きてる？」

○同・廊下（夜）

優作、美咲の部屋の前で立っている。

美咲の声「寝てる」

優作「起きてるじゃん。入ってもいい？」

美咲の声「入ったら、鼻の穴に指突っ込んで

奥歯ガタガタに言わせたるで」

優作「何で関西弁？」

優作、一呼吸置いて

優作「今度姉さんの所に行くんだけど、美咲も行かない？気分転換にもなると思うし」

優作、美咲の返答を待つ。

○同・美咲の部屋（夜）

美咲、写真を眺めながら考え込んでいる。

○同・廊下（夜）

優作、美咲の部屋の前に立っている。
返答がないため、部屋の前から立ち去ろうとする。

が、一旦立ち止まる。

考え込み、再び美咲の部屋の前に戻る。

優作「みさ・・・」

ドアが開き、優作の顔にぶつかる。

優作「痛い・・・」

美咲「まだいたの？」

優作「どう？一緒に行かない？」

美咲「まあどうしても一緒に行きたいって言

うなら、行つてあげてもいいけど」

優作「うん！行こう」

美咲「しょうがなくなだからな」

優作「ありがとう」

美咲「うるさい」

美咲、部屋に戻る。

優作、嬉しそうな表情を浮かべる。

○同・階段（夜）

香織、2人の会話を聞きながら笑顔を見せる。

○同・玄関（朝）

支度を済ませ出ようとしている香織、
2階にある美咲の部屋に向かつて

香織「美咲、早くしなさい」

美咲の声「うん」

リビングから優作が出てくる。

優作「美咲。もう行くよ」

美咲の声「うるさい」

優作「・・・」

○走る車内

運転している優作。助手席には香織、
後部座席には美咲が座っている。

優作「お昼何がいい？」

香織「手裏剣」

優作「忍者か」

香織と優作、笑いあう。

美咲「（ぼそっと）忍者でも食わねーよ」

○田舎の景色（夕）

田んぼや民家が並んでいる。
美咲達が乗る車が走ってくる。

○走る車内（夕）

香織、窓の外を見ている。

香織「懐かしい。この辺よく通ったよね」

優作「そうだね」

香織「美咲、もう少しで着くよ」

美咲、窓の外を眺めている。

○池田家・玄関（夜）

優作、香織、美咲がドアの前に立っている。
いる。

ドアが開き、池田綾香（46）が出てくる。

香織「綾香さん久しぶり！」

綾香「久しぶり」

香織「はいこれ」

香織、マヨネーズを渡す。

綾香「何これ？」

香織「泊まらせてもらうから、何か持ってこないと思ってる！」

綾香「・・・」

香織「じゃあ、お邪魔します」

家の中に入ってく香織。

優作「ごめん。僕はケチャップの方がいいって言ったんだけど」

綾香「いや、なんでだよ！この世にマヨネーズしか無くてマヨネーズだけは持ってこないわ！しかも使いかけだし」

優作「お昼ご飯の時に使ったから。美咲、挨拶して」

綾香、優作の後ろにいる美咲に気づく。

綾香「美咲？大きくなったね」

美咲「（ふてぶてしく）別に変わってないけど・・・」

綾香「こいつ、思春期迎えやがって」

綾香、美咲の髪をクシャクシャにする。

美咲「んー」

綾香「中入って」

優作「雄二さんは？」

綾香「出張」

優作「そっか。じゃあお邪魔します」

優作と美咲、家の中に入る。

○同・リビング（夜）

香織と綾香がソファでくつろいでいる。

香織「美味しかったー。やっぱり綾香さんの料理は世界一だよ」

綾香「ありがと」

優作、キッチンから戻ってくる。

綾香「美咲、学校で上手くやってる？」

優作「やってないかも。この間もクラスの子

と喧嘩しちゃって」

綾香「喧嘩？」

香織「うん。その子が他の子をいじめてたみたい。それで蹴っちゃったんだって」

綾香「蹴ったの？」

香織「そう」

綾香「そういう時は手でいかないと」

香織「私も言ったんだけど、あの子サッカー好きだから」

優作「そこじゃないでしょ」

綾香「友達は？」

香織「多分いない」

綾香「そっか・・・」

香織「明日、ハル君に会いに行こうと思うの」

綾香「ハルと仲良かったもんね」

優作「だけど美咲に言ってないんだよね。ハル君に会いに来たって言ったら、照れて行かないって言いそうだし」

綾香「でも仲良かったって言っても、最後に会ったのだいぶ前でしょ。話せる？」

優作「難しいかも。でもここにいた時は今よりも笑えてた。だから、少しでもあの時の事思い出してくれたらそれでいいかな」

香織「そうだね」

○同・リビング

香織、優作、綾香、テレビを見ている。

美咲、リビングに入ってくる。

パジャマ姿で髪の毛はボサボサ。

綾香「おはよ」

美咲「うん」

香織「これからふみさんの所行くんだけど、

一緒に行かない？」

美咲「・・・」

香織「行こうよ」

美咲「・・・」

綾香「ふみさんにお世話になったでしょ。挨拶

くらい行きなよ」

美咲「・・・分かった」

香織「じゃあ決まり」

綾香「ご飯は？」

美咲「いい」

美咲、リビングから出て行く。

香織「やったね」

優作「うん」

○同・客間

美咲、折り畳み鏡を見ながら、前髪を整えているが中々決まらない。

○一ノ瀬家・居間

ボーっと外を眺めている一ノ瀬ハル（
17）

その後ろで絵を描く一ノ瀬加奈（7）

加奈「ねえ見て」

描いた絵をハルに見せる。

絵には2人の男性が描かれており、1人はマイクを持って相手に向けている。

ハル「何これ？」

加奈「マイクを持ったおじさんが、もう一人のおじさんを不倫問題で追いつめてるの」

ハル「加奈、これからはおじさん描いちゃダメな」

加奈「えー、おじさん描きたい」

ハル「ゾウとかキリンとかいるだろ」
加奈「ゾウさんよりおじさんがいい」

居間に入ってくる一ノ瀬ふみ（75）

ふみ「ハル、何もやってないんだったら早く宿題終わらせな。あんたいつも終わらないんだから」

ハル「あんなもんとつくに終わったよ」

ふみ「あんたにしては珍しいね」

加奈「ウソだよ。お兄ちゃん何もしてないもん」

ハル、加奈の頭を叩く。

加奈、ふみの所にかける。

加奈「お兄ちゃんすぐぶつんだよ」

ふみ「やめなさい。女の子に手出すんじゃないよ」

加奈「ハルのバカ！バカハル！カンガル」

ハル「カンガルって何だよ」

チャイムが鳴る。

加奈「誰か来た」

加奈、玄関に向かって走って行く。

○同・玄関

加奈、玄関を開けると綾香が立っている。

加奈「あやちゃんだー」

綾香「ふみさん居る？」

加奈「いるよ」

加奈、綾香の後ろにいる香織、優作、美咲に気づく。

美咲、帽子をかぶっている。

加奈、不思議そうに香織たちを見る。

香織「大きくなったね、加奈ちゃん」

加奈「？」

○同・居間

加奈、走って居間に入ってくる。

加奈「あやちゃんが知らない人間連れてきた」

綾香、居間に入ってくる。

ふみ「どうしたんだい？」

綾香「お客さん」

香織たちが入ってくる。

香織「ふみさん、久しぶり！」

ふみ「久しぶりだね。こっち戻ってきたのかい？」

優作「昨日の夜こっち来ました」

香織「はい、お土産」

香織、ふみに紙袋を渡す。

ふみ、紙袋を覗き、中からケチャップを取り出す。

ふみ「・・・」

優作「すみません。僕はマヨネーズの方がいいって言ったんですけど」

綾香「お前らの頭の中、マヨネーズとケチャ

ップしかないの？」

ふみ、後ろにいる美咲に気づく。

ふみ「美咲ちゃんかい？」

美咲、頷く。

香織「もー、ちゃんと挨拶しなさい」

香織、ハルに気づく。

香織「ハル君久しぶり！覚えてる」

ハル「うん。久しぶり」

香織「ほら美咲、ハル君」

ハル「よう」

美咲、ハルを見て帽子を深くかぶる。

香織「美咲、Y Oで挨拶されたらY Oで返しなさい。H I P H O Pの基本でしょ」

綾香「ラッパじゃないから」

ふみ「座って待ってておくれ。今お茶煎れてくるから」

優作「ありがとうございます」

× × ×

テーブルにはお茶と煎餅が置いてある。

香織「ふみさん元気そうで良かった」

ふみ「あんたは変わってなさそうだね」

香織「そう？綺麗になったでしょ」

加奈「普通だよ」

ハル、加奈の頭を叩く。

加奈「また叩いた」

ふみ「久しぶりにどうしたんだい？」

香織「えっ・・ほら、みんなに会いたいなー
って。ねえ？」

優作「そうです。それに姉さんにも会ってな

かったし」

香織「みんなに会えてサイコーみたいな」

香織と優作、無理して笑う。

綾香「ハル、明日美咲のこと案内してやんなよ」

美咲「（綾香を見る）」

綾香「どうせ暇でしょ？」

ハル「いいよ」

美咲「（ハルを見る）」

綾香「いいでしょ？」

美咲、頷く。

加奈「加奈も行きたい」

綾香「加奈は私が遊んであげる」

加奈「じゃあ、あやちゃんと遊ぶ」

美咲、立ち上がる。

美咲「綾香さん、家の鍵貸して」

綾香「鍵？」

美咲「うん」

綾香、鍵を取り出し美咲に渡す。

美咲、鍵を受け取り居間を出て行く。

香織 「どこ行くの？」

美咲 「帰る」

香織 「ちよっと美咲」

ハル、美咲の後姿を見てる。

○池田家・リビング

美咲、探し物をしている。

棚の上の化粧道具を見つけ手に取る。

○同・玄関（夕）

綾香、香織、優作が入ってくる。

香織 「久しぶりだから、つい話し込んでしまった」

綾香 「何であの子帰ったの？」

優作 「分かんない」

○同・リビング（夕）

綾香、リビングに入って来ると、座っている美咲の後姿が見える。

テーブルにはファッション雑誌と化粧

道具が散らばっている。

綾香「何やってんの？」

香織と優作、リビングに入ってくる。

香織「あっ、それ綾香さんのでしょ。勝手に使ったらダメじゃない」

美咲「・・・」

香織「ちよっと、聞ってるの？みさ・・・」

香織、美咲の肩を掴み振り向かせる。

美咲の顔を見ると、眉毛は太く、頬はピンク、唇は真っ赤になっている。

香織「どうしたの？それ」

美咲「雑誌見ながらやった・・・」

香織「そんなモデルはいない！」

○同・外観（朝）

蝉の声が鳴り響いている。

○同・洗面所（朝）

美咲、鏡を見て何回も髪を直す中々決まらずに苛立つ。

美咲「んー」

綾香が入ってくる。

綾香「やってあげるからおいで」

○同・リビング（朝）

テーブルには化粧道具が置いてある。

綾香、美咲の顔に化粧をしている。

香織と優作、その様子を見ている。

綾香「出来た」

香織、美咲の顔を覗き込む。

香織「可愛い！親の顔が見てみたい」

優作「自分で言わないでよ」

美咲、テーブルの上の手鏡を取り自分の顔を見る。

綾香「どう？上手いでしょ」

美咲「うん」

綾香「次は髪の毛」

綾香、美咲のヘアセットを始める。

○一ノ瀬家・玄関

美咲、チャイムを押す。

少ししてハルが出てくる。

ハル「よう」

美咲「・・・よう」

加奈が来る。

加奈「みさきちゃん昨日と違う」

美咲「(得意げに) そう?」

ハル「そうか?」

美咲、目を細めハルを睨む。

ハル「何?」

美咲「何でもない」

ハル「準備するから待ってて」

ハル、家の中に入って行く。

加奈「まぶしいの?」

美咲、目を細めながら加奈を見る。

× × ×

美咲、玄関の前で待っている。

玄関の扉が開き着替えたハルが出てくる。

ハル「悪い、お待たせ」

美咲、目を細めハルを睨む。

ハル「怒ってる？」

美咲「別に」

ハル「・・・あつ、そういうことか」

美咲、目を見開く。

ハル「腹減ってんだろ。それなら早く言えよ。

今おにぎり持ってくるから」

ハル、家の中に戻ろうとすると

美咲「ハルのバカ！バカハル！カンガルー」

美咲、立ち去っていく。

ハル「だからカンガルーって何だよ」

○道

美咲、ハルの一步後ろを歩く。

ハル「なあ、オイオイって何でも売ってんの？」

美咲「オイオイ？」

ハル「あるじゃん。デパートみたいなの」

美咲「それマルイね」

ハル「オイオイじゃないの？綾香さんがオイ

オイって言った」

美咲「マルイ」

ハル「あの野郎」

美咲、少し笑顔を見せる。

ハル「じゃあさ、これも違うの？」

○回想・一ノ瀬家・リビング

ハルと綾香、向かい合って座っている。

テーブルの上にはお茶と煎餅が置いてある。

綾香、雑誌を読んでいる。

ハル「オイオイって変な名前だな」

綾香「何でも売ってるからね」

ハル「何でも？」

綾香「愛と勇気も買える」

ハル「東京ってすげーな」

綾香「向こうは犬も喋るから」

ハル「マジ？」

綾香「猫は英語喋る」

ハル「これがクールジャパンか」

綾香「腹減ったな」

○道

美咲とハル、歩いている。

美咲「なわけない」

ハル「ウソだったのか・・・」

美咲「アホ」

ハル「あっ」

少し先に川が流れている。

ハル、足早に川へ向かっていく。

美咲、川を眺めている。

○川辺

ハル、川の手前に立っている。

美咲、歩いてくる。

ハル「ここでよく遊んだよな」

美咲「うん」

ハル「服びしよびしよで家の中汚して、ばあ

ちゃんに怒られたよな」

美咲「うん」

ハル「今でもよく怒られるけど」

ハル、美咲に笑顔を向ける。

美咲「(ぼそっと) 変わってないね」

ハル「ん？」

美咲「ううん」

ハル、靴を脱ぐ。

美咲「入るの？」

ハル「気持ちーぞ」

ハル、川に入ってくる。

ハル「冷てー。あっ、100円！・・・じゃね

ーや」

美咲、足元にある沢山の石を見る。

そこから1つ拾い上げ眺める。

○回想・川辺・5年前

美咲、石にマジックで顔を描いている。

石には笑った顔。

いくつかの石にも同じように描かれている。
いる。

その石を眺めていると

山本の声「おい！転校生」

振り返ると山本(12)と原口(12)

が近づいてくる。

原口「何やっただよ」

山本、顔が描かれた石を見つけて手に取る。

山本「こいつ石に顔書いてるぜ。キモ」

山本、石を川に投げる。

原口「ハハハ。行こうぜ」

美咲「・・・」

立ち去る2人。

美咲、顔の描いてある石に喋りかける。

美咲「いし子ちゃん、なんでいつもこうなん
だろ。(いし子)大丈夫、美咲ちゃん？(美
咲)ちよっと辛いけど、いし子ちゃんがい
るから大丈夫」

ハルの声「何やってるの？」

振り返るとハルが不思議そうに見てい
る。

美咲、持っている石を急いで隠す。

ハル、地面にある顔が描かれた石を見
つける。

ハル「何これ？」

ハル、石を拾おうとする。

美咲、また投げられると思いい顔を伏せる。

ハル、何も描かれてない石を拾い

ハル「俺にも描いて！」

美咲、顔を上げハルを見る。

ハル、美咲に石を差し出す。

ハル「ん！」

石を受け取る美咲。

マジックで笑ってる顔を描いてハルに渡す。

ハル「（笑顔で）ありがとう！」

美咲「・・・うん」

美咲、照れくさそうに顔を伏せる。

ハル「いつもここにいるよな？」

美咲「他に遊ぶ所ないから」

ハル「家は？」

美咲「・・・」

ハル、手に持つてる石に喋りかける。

ハル「いし子、いつもここじゃつまらないだろ。(いし子) うん。つまらない。(ハル) じゃあ、うち来いよ」

美咲、ハルを見てる。

ハル「でも2人じゃつまらないよな(いし子) 美咲ちゃんて言う友達がいるんだけど、一緒に行ってもいいかな？」

美咲、ハルを見る。

ハル「じゃあ、そいつも連れて来いよ」

美咲、戸惑う。

ハル「いし子はうちに来るみたいだけど、どうする？」

美咲「いいの？」

ハル「来いよ！」

美咲「うん！」

ハル「じゃあ行こうぜ！」

美咲とハル、歩き出す。

○ 川

美咲、手に持った石を眺めている。

ハルの声「美咲」

前を向くと顔に水がかかる。

美咲「・・・」

ハル、笑っている。

美咲「こいつ・・・」

美咲、川に入ってハルに水をかける。

ハル「おい」

美咲「ハルが先にやったんだからね」

ハル「あっ」

ハル、美咲の後ろを指差す。

美咲「ん？」

美咲、後ろを見るが何もない。

再び前を向くと、顔に水がかかる。

ハル、笑っている。

美咲「もう許さない」

美咲、ハルに水をかける。

ハル「おい、やめろ」

美咲「やだ」

ハル、逃げる。

美咲「逃げるな、バカハル」

美咲、ハルを追いかける。

ハル、立ち止まり美咲に水をかける。

美咲「やったな」

美咲、足元の大きな石を手に取り、投げようとする。

ハル「それはやめろ」

美咲「ダメ？」

ハル「ダメ！」

○道

美咲とハルが水をかけあっているのを老夫婦が見ている。

爺さん「青春じゃのう」

婆さん「青春ですね」

爺さん「・・・青春じゃのう」

婆さん「青春ですね」

爺さん「・・・青春じゃのう」

婆さん「（笑顔で）しっこいぞ」

○神社前の通り（夕）

美咲とハルが歩いている。

美咲、靴が濡れている。

美咲「びしょびしょ」

ハル「何で靴のまま入るんだよ」

美咲「ハルが水かけるから」

ハル「じゃあ俺の履く？」

美咲「水虫がうつるからいい」

ハル「おい」

美咲、立ち止まる。

目線の先には鳥居があり、その先に長く続く階段がある。

ハル「行く？」

美咲「うん」

美咲とハル、階段を登って行く。

○神社・境内（夕）

美咲とハル、拝殿の前に立っている。

美咲「懐かしい」

ハル「かくれんぼとかしたよな」

美咲「ハル、見つけるの上手かった」

ハル「そうだっけ？」

美咲「でも隠れるのは下手で、ちらちら見てくるからすぐ分かった」

ハル「ばれてたの？」

美咲「ばればれ」

美咲、賽銭箱を見る。

ハル「なんかお願いするか」

ハル、ポケットから小銭を取り出し差し出す。

ハル「ほい」

美咲、小銭の中から10円を手取る。

美咲「ありがとう」

ハル、適当に小銭を選び賽銭箱の中に投げ、美咲もそれに続く。

ハル、鈴を鳴らし2人で手を2回叩く。

ハル「今日の晩飯にインド人が来て、パスタを作ってくれますように」

美咲「そこはカレーだろ」

ハル「お願いした？」

美咲「お願いはしない」

ハル「じゃあ何するの？」

美咲「覚えてないの？」

ハル「何を？」

美咲「内緒」

ハル「何だよ言えよ。俺の願い事盗み聞きしたくせに」

美咲「勝手に言ったんでしょ」

高木の声「楽しそうだな」

法衣を着た高木泰典（51）が2人の方に歩いてくる。

ハル「おっちゃん」

高木「誰この子？」

ハル「美咲。覚えてない？」

高木「美咲・あー、美咲ちゃんか！可愛くなつたね」

美咲「誰？」

ハル「エロがっぱ」

美咲「あー」

高木「俺のことそう呼んでたの？」

ハル「うん。クリティカルゴールデンエロが

っぱ」

高木「増えてんじゃねーか」

ハル、笑う。

高木「でも本当に可愛くなったね。おじさんと結婚するか。ハハハ」

美咲「しねーよ。じじい」

高木「じじいって・・・」

ハル「まあ気にすんなよじじい」

高木「じじいって言うな」

ハル「エロがっぱよりマシだろ」

高木「いや、どっちもマシじゃねーよ」

ハル「じゃあ、どすけば変態クソがっぱ」

高木「悪口じゃねーか。そうだ、でっかいカ

ブトムシ捕まえただよ」

ハル「マジ？」

高木「見るか？」

ハル「うん。美咲も見るだろ？」

美咲「ここで待ってる」

ハル「でっかいのに」

高木「行くぞハル。マジででかくてな、去年

見つけたやつのは3倍はあるぞ」

ハル「マジ？それもう怪獣じゃん」

ハルと高木、去って行く。

美咲、拝殿の石畳を見る。

○回想・神社・境内

美咲、石畳に座って目を閉じたまま数を数えている。

美咲「はーち・きゅう・じゅう！」

美咲、辺りを見渡す。

○回想・同・木の陰

ハル、美咲の姿を木の陰から覗く。

ハル「かくれんぼの鬼才と言われたこの俺を

そう簡単に見つけられ・おっと」

ハル、急いで身を隠す。

ハル「危ねー、見つかる所だった。でもそんな簡単にはいかないぜお嬢ちゃん」

ハル、再び木の陰から顔を出す。

○回想・境内

美咲「ん？」

木の方を見るとハルがちらちらこちら
を見てくる。

美咲「ばれてるよ」

ハルが隠れている木に近づいて行く。

○回想・同・木の陰

慌てて身を隠すハル。

ハル「居所がばれたか。いや、そんな簡単に

見つかるはずが・・・」

ハル、木から顔を出す。

ハル「あれ、いない」

美咲「わっ！」

美咲、ハルの後ろから驚かす。

ハル「おっ」

美咲「みーっけ」

ハル「ウソだろ。何で分かった？」

美咲「顔見えてたもん」

ハル「見えてるなら見えてるって言えよ」

美咲「見えてるって言ったらもう見つかった
るからね」

ハル「まあいい、かくれんぼ界のステイプ・
ジョブスと言われた俺がすぐに見つけてや
るよ」

ハル、境内の真ん中に行って数を数え
る。

ハル「ウーノ、ドゥーエ、トレ、クアットロ：」

美咲「何でイタリア語？」

× × ×

草むらの中に隠れる美咲。

人影が美咲を覆い、見上げるとハルの
姿が映る。

ハル「見つけ」

美咲「ハル、見つけるのは上手いよね」

ハル「美咲がどこに隠れてたって見つけられ
るよ」

美咲「どこでも？」

ハル「うん」

美咲「真っ暗でも？」

ハル「うん」

美咲「何も見えなくても？」

ハル「うん」

美咲「そんなの無理だよ」

ハル、手を差し伸べる。

美咲がハルの手を掴んで立ち上がると、

太陽の光が美咲の顔を射す。

美咲、まぶしそうにしている。

ハル「見つけるよ、絶対」

美咲、ハルを見ている。

× × ×

ハルと美咲、賽銭箱の前に立っている。

美咲「何かお願いしようよ」

ハル「願い事する前にまず感謝」

美咲「感謝？」

ハル「ばあちゃんが言った。都合の良い時

だけお願いしても叶わないんだって。まず

は感謝すること。そういう人のお願いだっ

たら叶えてくれる」

美咲「お礼をするってこと？」

ハル「そう。人も同じで相手に何かを求めるんじゃない、相手の為に何かしてあげる。とが大事なんだって。人って1人じゃ何もできないだろ。だから居場所を作ってあげる。どの場所に居るかで人は変わるから」

美咲「・・・」

ハル「きつとみんな、自分の居場所を探してるんだと思う。だから俺は、その人が咲ける場所を作ってあげたい」

ハル、ポケットから小銭を取り出す。

その中から10円を取り美咲に渡す。

ハル「ほい」

美咲、10円を受け取る。

ハル「ありがとうだから10円」

美咲「ダジャレじゃん」

ハルも10円玉を取り、賽銭箱に投げ入れる。

美咲も後に続き投げ入れる。

鈴を2回鳴らし、手を2回叩く。

ハル「いつもありがとうございます」

美咲「ありがとうございます」

ハル「よし、帰るか」

美咲「うん」

高木の声「ハル」

高木、2人の方に歩いてくる。

ハル「エロがつ・おっちゃん」

高木「エロ？」

ハル「何でもない」

高木「2人で何お願いしてたんだ？」

ハル「感謝」

高木「感謝？」

美咲「お願いする前に、まず感謝するんだよ」

高木「偉いね美咲ちゃんは。良いお嫁さんになるよ」

美咲「ほんとに？」

高木「ああ、きつとなるよ。そうだ、大人になつたらおじさんと結婚するか？」

美咲「(笑顔で)絶対やだ！」

高木「そんな笑顔で言わなくても・・・」

ハル「じじいとは嫌だろ」

高木「じじいって言うな」

美咲「（笑顔で）絶対やだ！」

高木「美咲ちゃん分かったから」

ハル「おっちゃんほんとにモテねーな」

高木「俺の良さは子供には分かんねーよ」

ハル「子供には大人に見えないものが見える

だなぁ」

高木「相田みつをみたいに言うな」

美咲「（笑顔で）絶対やだ！」

高木「もう分かったから」

ハル、笑っている。

高木「笑うなハル」

○同・境内（夕）

美咲、物思いにふけている。

ハルの声「美咲」

振り向くとハルと高木が来る。

ハル「めちゃくちゃでかかったぞ」

美咲「うん」

ハル「今度あれよりでかいの見つけよーぜ」

高木 「じゃあ田中のじーさんも誘うか」

美咲、笑みを浮かべる。

ハル 「じゃあ帰るか」

美咲 「うん」

高木 「美咲ちゃん、また遊びに来なよ」

美咲 「暇だったらね」

高木 「いつでもおいで」

ハル 「じゃあな、おっちゃん」

高木 「おう」

美咲とハル、神社から立ち去っていく。

○道（夕）

美咲とハル、歩いている。

分かれ道に差し掛かり、立ち止まる。

ハル 「じゃあ俺こっちだから」

美咲 「うん」

ハル 「じゃあな」

ハル、立ち去っていく。

美咲 「・・・ハル」

ハル、振り返る。

美咲「明日も案内してもらっていい？」

ハル「いいよ」

美咲「じゃあ明日」

ハル「おう」

2人、反対方向に立ち去っていく。

美咲、嬉しそうな表情を浮かべる。

○池田家・リビング（夜）

美咲、香織、優作、綾香、食卓を囲んでいる。

テーブルには数品のおかずが並んでいる。真ん中にはマヨネーズ。

香織「今日どうだった？」

美咲「まあまあ」

香織「ものすごく楽しかったことね」

美咲「楽しいなんて言っていないじゃん」

香織「美咲の楽しいの最上級はまあまあじゃない」

ない」

美咲「・・・」

綾香「ハル、変わってなかったでしょ？」

美咲「うん」

綾香「あの子真っ直ぐなバカだから、精神年齢3歳くらいで止まつてるのよ」

美咲、笑みを浮かべる。

優作、美咲を見る。

優作「明日もハル君と遊ぶの？」

美咲「うん」

優作「そっか、楽しんで来なよ」

美咲「・・・うん」

香織「そうよ。ジョージ・カルロスなんだから楽しまない」と

綾香「ジョージ・カルロス？」

香織「綾香さん知らない？今の女子高生はジ

ョージ・カルロスって呼ばれてるの」

優作「それって、JKのこと？」

香織「そう、ジョージ・カルロス」

優作「JKって言うのは、女子、高生で、J

Kって事だよ」

香織「ジョージ・カルロスじゃないんだ・・・」

綾香「何で悲しそうなの？」

優作「でもほら、ジョージ・カルロスってな
んか可愛いよね」

香織「そうでしょ。そっちの方がいいと思う
んだよね」

綾香「可愛くないわ」

再び食事を始める4人。

香織「パパ、ジョージ・カルロス取って」

優作、マヨネーズを取り香織に渡す。

優作「はい」

綾香「それマヨネーズな」

○一ノ瀬家・玄関（朝）

美咲、玄関前に立っている。

玄関の扉が開き、ふみが出てくる。

美咲「おはよう」

ふみ「おはよう」

美咲「ハルいる？」

ふみ「（家の中に向かって）ハル！美咲ちゃん
来たよ」

ハルの声「分かった！もうちよい待って」

ふみ「もうあの子は。上がって待ってておくれ」

○同・居間

美咲とふみ、入ってくる。

ふみ「ちよっと待ってて」

美咲「うん」

ふみ、居間を出る。

美咲、座布団に座ると、庭に咲く向日葵を見つめる。

縁側に行き、向日葵を眺めると

ハルの声「お待たせ」

振り向くとハルの姿。

ハル「今日小学校行こうぜ」

美咲「小学校？」

○小学校・職員室

本を読んでいる坂本幸子（58）

職員室のドアが開き、ハルと美咲が入ってくる。

ハル「さっちゃん」

坂本「ああ、一ノ瀬さん」

坂本、美咲を見る。

ハル「松岡美咲。6年の時に転校してきて、同じクラスだった・・・」

坂本「ああ、松岡さん。お久しぶりです」

美咲、会釈する。

坂本「ちよつと待ってて下さい。今、お茶煎れます」

ハル「ありがとう」

坂本、お茶を入れに席を立つ。

ハルと美咲、坂本が座っていた近くの席に着く。

ハル「このクルクル回る椅子に座りたくて、教師を志したこともあったな」

美咲「どんな理由」

ハル「そういや、美咲の将来の夢って何だったけ？」

美咲「え？」

ハル「なんか前に聞いたような・・・」

美咲「忘れた」

坂本「お待たせしました」

ハル「ありが・・・」

坂本、2人にお茶を出す。

ハル、グラスを覗くと見たことも無い
ような色をしている。

ハル「さっちゃん、これ何？」

坂本「お茶です」

ハル「飲めるの？」

坂本「物理的には飲めます」

ハル「美咲、先に飲んで」

美咲「ハルが飲んでよ」

ハル、お茶をじつと見る。

ハル「そうだ、学校の中周りたいたいんだけどい
い？」

坂本「いいですよ」

ハル「サンキュー。美咲、行こうぜ」

美咲「うん」

美咲とハル、立ち上がる。

坂本「飲まないんですか？」

ハル「後で飲むよ」

坂本「じゃあ一口だけ飲んで行って下さい。

美味しいですよ」

ハル「・・・じゃあ一口だけ」

ハル、グラスを持ち恐る恐る飲む。

美咲「どう？」

ハル「茶葉を摘んだおばあちゃんが舌の上でサンバを踊り、その後方でおじいちゃんが、へビーマタルを歌っている。そんな感じ」

美咲「どんな感じ？」

○同・音楽室

ピアノやタンバリンなどの楽器が置いてある。

ハルと美咲、楽器を眺めている。

ハル、タンバリンを手に持つ。

ハル「懐かしいなー・・・カスタネット」

美咲「タンバリンね」

○同・理科室

ハルと美咲、人体模型を見ている。

美咲「可愛い」

ハル「どこが」

○同・美術室

美咲とハル、壁に貼ってある生徒たちの絵を見ている。

美咲「加奈ちゃんの描いた絵あるよ」

ハル「どれ」

ハル、加奈が描いた絵を見る。

絵には頭を下げている人が描いてあり、題名には「不祥事を隠ぺいしたおじさん」と書いてある。

美咲「テーマが深いね」

ハル「眠っていたジャーナリズムが目覚ましたか」

○同・6年1組

ハル、窓際が一番後ろの席に座っている。前の席には美咲。

ハル「これに座ってたんだな」

美咲「小さい」

ハル「俺がこの席でさ、美咲がその席だったよな」

美咲「ハル、寝てばかりだった」

ハル「そうだった？」

美咲「いつも教科書忘れてたし」

ハル「家で勉強してたからな」

美咲「はいはい」

ハル「信じてねえな。じゃあなんか問題出してみるよ」

美咲「問題？・・・じゃあ、ペリーは何に乗って日本に来た？」

ハル「バカにし過ぎだよ。めちゃくちゃ簡単じゃねーか」

美咲「言ってみて」

ハル「一輪車」

美咲「バカ」

ハル「じゃあ答え何だよ？」

美咲「え？それはほら、あれだよ」

ハル「美咲も分かってねーじゃん」

美咲「分かってるよ」

ハル「じゃあ言ってみて」

美咲「・・・泳いで来た」

ハル「マジで！あの人泳いで来たの？」

美咲「そ、そう。泳いで来た」

ハル「何泳ぎで来たの？」

美咲「個人メドレー」

ハル「すごいな。でも言われてみたら、泳ぎ

上手そうだよな」

美咲「（ぼそっと）バカで良かった」

ハル「何？」

美咲「ううん。何でもない」

ハル「なあ、トイレ行ってくるから待ってて」

美咲「うん」

ハル、教室を出て行く。

美咲、教室を見渡した後、前を向く。

○回想・同・6年1組

美咲、前からプリントが配られてきて

1枚取る。

後ろの席のハルに渡そうとするがハルは寝ている。

美咲「ハル・ハル・ハル・ハル」

ハル「違うよばあちゃん、これケンタッキーじゃなくてケンタウロスだよ」

ハル、寝言を言う。

美咲「どんな間違ってるの」

起こすのを諦めハルの机にプリントを置く。

坂本、教卓の前に立ちプリントが全員に届いたのを確認する。

坂本「今日は皆さんに将来の夢を書いてもらいます」

山本「そんなもの無いよ」

坂本「無くても大丈夫ですよ。まずは夢について考えてみて下さい。先の事を考えることで、今の自分が何をすればいいのか分かってきます。まずは考えてみましょう」

優子「私、お花屋さんになる」

山本「小さい夢だな」

優子「いいでしょ。私の夢なんだから」

坂本「とてもいい夢です。他の人からしたら小さい夢に見えても、その人にとってはとても大きな夢なんです。人の夢の大きさは、その人にしか分からないんですよ」

美咲、坂本の話当真剣に聞いている。

優子「そうだよ、分かった」

山本「うるせーな」

坂本「じゃあ考えてみましょう」

美咲、プリントを見る。

プリントには「私の将来の夢」と書かれて
れている。

後ろを振り向き、寝ているハルを見る。

前を向き、プリントに書き出す。

× × ×

チャイムが鳴る。

ハルはまだ寝ている。

坂本「では皆さん今日はここまでです。プリントは家に持って帰って下さい。書いた人

はその夢を叶えるためにどうすればいいか、
まだ決まってる人はいない人は夢について考えてみ
て下さい。それでは皆さんまた明日」

坂本、教室から出て行く。

生徒たちが帰る準備をしている。

美咲がプリントを見ていると、山本が
来てプリントを奪う。

山本「転校生の夢は何だよ」

プリントには「ひまわり」と書いてあ
る。

山本「ひまわり？」

美咲、山本からプリントを奪い返そう
とするが避けられる。

山本「お前、ひまわりになりたいのかよ。人
間だからひまわりにはなれないんだよ」

美咲、俯く。

山本「原口来いよ」

原口、山本に近づいてくる。

山本「見てみるよこれ、こいつ変人だぜ」
原口にプリントを見せる。

原口「キモ！人間やめるのかよ」

ハル、目を覚ます。

美咲「お願いだから返して・・・」

山本、少し離れると手を叩いて美咲を挑発する。

山本「取り返してみろ、変人女」

美咲、涙ぐむ

ハル「何やってんの？」

山本「見ろよハル。こいつひまわりになりた
いとか言ってるんだぜ。そんなのなれるわ
けねーじゃん」

ハル「いいじゃねえかよ、美咲がなりた
いて言ってるんだから。何でお前が決めるんだ
よ。なれるかどうかは美咲が決めることだ
ろ」

山本「なれるわけないだろ。ひまわりになり
たいなんて普通思わねーよ」

ハル「美咲にとっては普通なんだよ！お前の
普通を押し付けんな」

山本「いや普通じゃないだろ！こいつの普通

は普通じゃねーよ」

ハル「じゃあ普通って何だよ？」

山本「・・・花屋とか」

優子「さっきお花屋さんバカにしたじゃん」

山本「お前は黙ってる」

志保「そんな言い方しなくていいじゃん」

山本「お前らには関係ないだろ」

優子「そっちが先にバカにしてきたんでしょ」

山本「してねーよ」

優子「したよ！ね、原口」

原口「え？・・・いや・・・うん」

山本「おい原口！お前裏切るのかよ」

原口「いや・・・その・・・」

志保「原口！どっちなの？」

原口「どっちって言われても・・・」

美咲、走って教室から出て行く。

ハル「美咲！」

ハル、美咲を追いかける。

美咲、顔を伏せて座っている。

ハルの声「あんまり気にすんなよ」

美咲、顔を上げるとハルが隣に座る。

美咲「私ってやっぱりおかしいのかな？」

ハル、美咲を見てる。

美咲「今まで友達が出来たことなく、ハルが初めての友達だったの。人と喋るのが苦手で、他の人が楽しそうに喋ってるのを見ると、どんどん自分のことが嫌いになっていった」

ハル「・・・」

美咲「でもね、ハルという時は普通に喋れて、私も他の子と変わらないんだなって思ったの。ハルという時の自分が好きだった」

ハル「・・・」

美咲「でもやっぱり違ったみたい。私の勘違いだった。特別じゃなくていいから、普通の子と同じが良かった」

美咲、泣き出す。

ハル「俺もさ、美咲という時の自分が好きな

んだ。俺とは普通に喋ってくれるだろ。それが嬉しくてさ、なんか自分だけ特別な気がして」

美咲、ハルを見る。

ハル「美咲は気づいてないみたいだけど、美咲には良い所がたくさんがある。他の子とは違ったとしても、美咲は美咲だろ」

ハル、美咲に笑顔を向ける。

美咲「・・・うん」

美咲、涙を拭う。

美咲「ねえハル」

ハル「ん？」

美咲「私の良い所って何？」

ハル「え？それはあれだよ・・・あの・・・」

美咲「ないじゃん」

ハル「あるよ」

美咲「何？」

ハル「最新家電に詳しい」

美咲「詳しくない」

ハル「宇宙からの声が聞こえる」

美咲「聞こえない」

ハル「お茶出しのタイミングが絶妙」

美咲「出したことない」

ハル「まあ気にすんなよ」

美咲「結局無いじゃん」

ハル「男って言うのはな、女の良い所は言いづらいもんなんだよ」

美咲「何それ」

ハル「じゃあ帰ろうぜ」

美咲「・・・うん」

ハル、ドアに向かって歩いていく。

美咲「ハル」

ハル、立ち止まり振り返る。

ハル「どうした？」

美咲「ハルが困った時は、私が助けてあげる」

ハル「ありがとう。でも大丈夫」

美咲、ハルを見てる。

ハル「俺じゃなくて、目の前に困ってる人がいたらその人を助けてあげて。美咲はそれが出来る人だから」

美咲「・・・分かった」

○同・6年1組

美咲、思い出に浸っているとハルが戻
ってくる。

ハル「悪いい、中々出なくて」

美咲「女の子の前で出ないとか言わないで」

ハル「中々発射しなくて」

美咲「電車みたいに言わないで」

ハル「出したら腹減ったから、家で飯食おう
ぜ」

美咲「また言った」

ハル「噴射したら・・・」

美咲「噴射はやめて」

○道

美咲とハル、歩いている。

ハル「夏休みって言ってもやることないよな」

美咲「今まで何してたの？」

ハル「カブトムシ捕まえたり、川で水遊び」

美咲「子供か」

ハル「東京はいいよな。遊ぶ所いっぱいある
だろ？」

美咲「・・・うん」

ハル「帰ったら、友達と遊びに行ったりすん
の？」

美咲「・・・うん、行くよ」

ハル「そっか」

ハル、嬉しそうな表情を浮かべている。

美咲、俯く。

○一ノ瀬家・居間・(昼／＼夜)

加奈、絵を描いている。

ふみ、編み物をしている。

ハル「腹減ったー」

ハルと美咲、入ってくる。

加奈「おかえり！あつ、美咲ちゃんだ」

美咲「ただいま」

ハル「加奈、学校でもおじさん描いてるだろ？」

加奈「学校行ったの？」

ハル「美術室の絵見たよ」

加奈「あれはね、悪いことしてる時は気づかないけど、見つかった時に自分のやったことの大きさに気づくんだよっていうメッセ―ジを込めたの」

美咲「深い」

ハル「加奈、俺より上に行くな。兄の尊厳がなくなる」

加奈「どっちもバカだとバランスが悪いでしょ。だからね、加奈が賢くなるの。お兄ちゃんじゃ無理だもん」

ふみ「そうだね。この子じゃ無理だよ」

ハル「そんなことねえよ。俺だってそれなりに・・・」

ふみ「お昼ご飯にするか。美咲ちゃん食べた
いものある？」

美咲「何でもいいかな」

ふみ「じゃあちよつと待ってな」

美咲「うん」

ふみ、出て行く。

ハル「加奈は知らないと思うけどな、学校では超優秀で通ってて・・・」

加奈「(絵を描きながら)出来ない人ほど自分を大きく見せる」

ハル「・・・」

美咲、ハルの肩に手を置く。

ハルが振り返ると美咲が頷く。

× × ×

ハルと加奈、寝ている。

美咲、お茶を飲んでいる。

そこにふみが入ってくる。

ふみ「美咲ちゃんが来てるのにこの子ったら」

美咲「ううん、いいの」

ふみ「この子はいっになったら大人になるんだろうね。ずっと子供のままだよ」

美咲「ハルには変わってほしくないかも。久しぶりに会った時、どう接していいかわからなくて不安だった。でもハルの笑った顔がああ頃と同じで、一緒に居る時も昔と変わらずにいられた。ここを離れてからの時

間が無かったみたいに。それはたぶん、ハルが変わらずにいてくれたからだと思う」

ふみ「この子の両親が亡くなった時、一度も泣かなかったんだよ」

美咲「・・・」

ふみ「その時はまだ加奈が生まれたばかりでよく泣いてたから、自分まで泣いたらばあちゃんが大変だろって」

美咲「ハルらしい」

ふみ「自分には両親との思い出があるけど、加奈は1つもないから、大きくなった時に淋しくならないよう、2人の分も頑張るって言ってたけど、今じゃ加奈の方が大人だよ」

美咲「ふふ」

ふみ「自分よりも周りを大切にする子だから、美咲ちゃんが昔のままいられるよう、この子なりに考えてるんだろ」

美咲、ハルを見る。

ふみ「（時計を見る）もうこんな時間かい。私

は出掛けるから、美咲ちゃんはゆっくりしていきな」

美咲「うん」

ふみ、出て行く。

美咲、ハルを見ると

ハル「ばあちゃん、それはサーティワンアイスクリームじゃなくてゴルゴ13だよ」

と、寝言を漏らす。

美咲、微笑む。

× × ×

ハル、目を覚ます。

隣には加奈が寝ている。

視線を移すと、穏やかに眠っている美

咲の顔が映る。

× × ×

美咲、目を覚ますと体にブランケットが掛けられている。

外を見ると日が暮れている。

そこにハルが入ってくる。

ハル「起きた？」

美咲「寝ちゃった」

ハル「晩飯食ってく？」

美咲「いいの？」

ハル「食ってけよ」

ふみ、入ってくる。

ハル「美咲も食べるって」

ふみ「そうかい」

美咲「お昼も食べたから、私も手伝う」

ふみ「じゃあ頼むよ」

× × ×

外は日が落ちて暗くなっている。

美咲、ハル、ふみ、加奈が食卓を囲んでいる。

テーブルには数品のおかずが並んでいて、その中に青い玉子焼きが置かれている。

美咲、玉子焼きをスマホで撮っている。

ハル「何それ？」

美咲「玉子焼き」

ハル「何で青いの？」

美咲 「美味しそうでしょ」

ハル 「ばあちゃん、何で青いの？」

ふみ 「少し目を離したら・・・青くなってた」

加奈 「もう食べていい？」

美咲 「じゃあ食べよう」

美咲、床にスマホを置く。

加奈 「いただきます！」

加奈、玉子焼きに手を伸ばす。

ハル 「加奈、お前はばあちゃんが作ったやつにしろ」

美咲 「それどういう意味？」

ハル 「ほら、俺が一番に食べたいからさ」

美咲 「そんなに食べたかったの？じゃあ食べて」

ハル 「・・・うん」

ハル、玉子焼きを取り、口元まで運ぶと手が止まる。

美咲 「どうしたの？」

ハル 「走馬燈が見える」

美咲 「何言ってるの？」

加奈、玉子焼きを取る。

加奈「いただきます」

ハル「待て、加奈」

加奈、玉子焼きを食べる。

加奈「・・・」

ハル「加奈？」

加奈、箸を置く。

加奈「おばあさま、私は二桁の引き算を会得するため、勉強に励んで参ります。せっかく作っていただきましたところ申し訳ないが、食事はその後いただきますとうございます」

加奈、去って行く。

ハル「人格変わったぞ」

ふみ「一時的に脳がマヒしたんだろ」

美咲「・・・」

○ 田んぼ道（夜）

美咲とハル、歩いている。

美咲「ごめんね・・・」

ハル「いいよ。加奈も戻ったし」

美咲「少しくらいなら出来ると思ったんだけど・・・」

ハル「明日だけ帰るの？」

美咲「うん」

ハル「そっか」

沈黙が流れる。

ハル「また来いよ」

美咲「うん。絶対来る」

ハル「次はもっとましなもの作ってくれよ」

美咲「味は悪くなかったんだけど・・・」

ハル「明日病院行った方がいいぞ」

美咲「どういう意味。てかハル食べなかったでしょ」

ハル「食べられないでしょ」

美咲「ハルなら大丈夫」

ハル「何で？」

美咲「バカだから」

ハル「おい」

2人、笑いあう。

○一ノ瀬家・居間（夜）

ふみと加奈、テレビを見ている。

ハル、入ってくる。

加奈「お兄ちゃん、おかえり」

ハル「ただいま」

ふみ「この携帯あんたのかい？」

ふみ、手元のスマホを見せる。

ハル「それ美咲のだ。渡してくる」

ふみ、ハルにスマホを渡す。

ふみ「気をつけなよ」

ハル「うん」

○池田家・玄関（夜）

ハル、玄関の前に立っている。

ドアが開き綾香が出てくる。

綾香「どうしたの？」

ハル「美咲いる？」

綾香「お風呂入っちゃった」

ハル、美咲のスマホを出す。

ハル「美咲が忘れていった」

綾香「ありがとね」

ハル「うん。じゃあ」

ハル、帰ろうとする。

綾香「上がっていきなよ。お茶くらい出すから」

ハル「・・・じゃあ少しだけ」

○同・リビング（夜）

ハル、香織、優作、綾香、ソファーに座っている。

テーブルには人数分のお茶。

香織「わざわざありがとね」

ハル「うん」

優作「ハル君、美咲って昔と比べてどう？」

ハル「んー・・・そんなに変わってないかな」

香織「ほんとに？なんか気強くなってない？」

ハル「そう？分かんないけど」

香織「中学生になってから変わっちゃたんだよね美咲。この間なんてね、相手の子蹴っちゃったんだから」

ハル「美咲が？」

優作「うん。クラスの子がいじめられてたみたいで、助けるためにやったことだと思ってるんだけど、少しやり過ぎなのかなって・・・このままだと、どんどん美咲が孤立していく気がして」

ハル「友達は？」

香織「たぶんいない」

ハル「・・・」

優作「僕の責任でもあるんだ。転勤が多いから友達も作りづらかっただろうし、そのせいで美咲には辛い思いさせてきちゃったから・・・」

ハル「・・・」

優作「ここに来たのもね、ハル君なら美咲のこと変えてくれるかもって。そしたら久しぶりに美咲の笑った顔が見れた。もう見れないと思ってたから嬉しかった」

綾香「あんたのバカで素直で飾らないところが、美咲にとっては心地良いんだろうね」

ハル「バカは余計だけど」

香織「ハル君みたいな人が向こうにも居たらいいんだけど」

ハル「本当に友達いないの？」

香織「うん。いた気配がない」

ハル「そっか・・・」

優作「ハル君、時間大丈夫？」

ハル「そろそろ帰ろうかな」

○同・玄関（夜）

ハル、靴を履いている。

香織、優作、綾香、見送りに来てる。

優作「ハル君、送ってくよ」

ハル「大丈夫」

香織「本当に大丈夫？最近変な人多いから」

ハル「この辺はいないよ」

香織「でも最近、野生の変な人が増えてるって、テレビで言ってたから・・・」

綾香「野生の変な人って何？」

ハル「すぐそこだから、じゃあ」

綾香「おやすみ」

ハル、玄関を出る。

○池田家・リビング（夜）

香織と綾香、雑誌を読んでいる。

優作、パソコンを打っている。

テーブルの上には美咲のスマホ。

美咲、パジャマ姿で入ってくる。

綾香「じゃあ、お風呂入っちゃうね」

香織「どうぞ」

綾香、リビングを出る。

香織「美咲、ハル君の家にスマホ忘れたでし

よ。ハル君が持ってきてくれたよ」

美咲「ハル来てたの？」

香織「さっきまでいた」

美咲「そう」

香織「美咲のこと心配してたよ」

美咲「心配？」

香織「美咲に友達いないと思うって言ったら

心配してた」

優作「ママ」

美咲「それハルに言ったの？」

香織「美咲のこと相談してたから」

美咲「・・・」

優作「ほら、美咲の友達のことお父さんたち

分からないから、もしかしたらいないかも

って」

美咲「何で言ったの？分からないなら言わないでよ！」

香織「どうしたの急に？何で怒るの」

美咲「友達のこと言ったことある？ないでし

よ！じゃあ勝手に言わないでよ」

香織「じゃあ話してよ！自分のこと全く言わ

ないじゃない！美咲が何考えてるか分から

ないの」

美咲「別に分かってほしいなんて言っていない」

香織「親なら分かるうとするでしょ」

優作「2人とも落ち着いて」

美咲「何でいちいち言わないといけないの」

香織「親子なんだから言ってよ」

美咲「親だからって言う必要ないでしょ」

香織「何でも言い合えるのが家族でしょ」

美咲「言い合えないと家族じゃないの？」

香織「私は美咲に話してもらいたいの」

美咲「親だからって何でも話せるわけじゃない」
「い」

香織「何ですよ！親だから話せるんでしょ」

綾香、入ってくる。

綾香「ちよつとどうしたの？」

美咲「もういい！話す、話さないは私の自由」

香織「それじゃあ何も変わらないじゃない」

美咲「別に変わらなくていい」

香織「美咲のことが心配なの」

美咲、リビングを出て行く。

優作「美咲」

○一ノ瀬家・ハルの部屋（夜）

月明かりが窓から差し込んでいる。

ハル、石を見ている。

石には笑った顔が描かれている。

ふみの声「ハル！ちよつと降りておいで」

○池田家・リビング（夜）

優作、固定電話で話している。

香織と綾香、座っている。

優作「はい・・分かりました。こっちも探しに行きます。香織が家にいるので何かあったら電話して下さい。お願いします」

優作、電話を切る。

優作「ハル君が探しに行ってくれるって」

綾香「じゃあ私たちも行こう」

優作「うん」

綾香、部屋を出る。

優作、香織のもとに行く。

優作「大丈夫？」

香織「ちよつと言い過ぎたかな」

優作「いつか美咲も分かってくれるよ」

香織「そうだといいな」

優作「探しに行ってくるね」

香織「うん」

優作、部屋を出る。

○神社前の道（夜）

ハル、周りを見渡しながら自転車を漕いでいる。

鳥居を過ぎると、何かを思い出し止まる。

振り返り、鳥居を見る。

○神社・境内（夜）

ハル、階段を登ってくる。

拝殿の方に目をやると美咲が座っている。

○回想・同・境内・（夜）

美咲、賽銭箱の隣に浮かぬ表情で座っている。

ハルの声「何かあったら、いつもここだよな」

美咲、顔を上げるとハルが立っている。

ハル「よう」

美咲「・・・」

ハル、美咲の隣に座る。

ハル「みんな探し回ってるぞ」

美咲「そんなの知らない」

ハル「転校するんだってな」

美咲「・・・」

ハル「何で言わないんだよ」

美咲「言ったら本当に行かないといけないも
ん」

ハル「言わなくても転校はするの」

美咲「まだ分かんないもん・・・」

ハル「美咲」

美咲「何？」

ハル「向こう行ったら友達作れよ」

美咲「出来ないよ」

ハル「俺と話してるみたいにするばいいんだ
よ」

美咲「無理だよ」

ハル「何で？」

美咲「ハルみたいな能天気な人いないもん」

ハル「確かに、俺みたいな能天気な奴なかなかいな・・・って誰が能天気だよ」

美咲「ハルってさ、人と喋る時何考えてるの？」

ハル「別に何も」

美咲「嫌われたらとか、会話が続かなかったらどうしようとか考えないの？」

ハル「考えないけど」

美咲「いいな、能天気は・・・」

ハル「うるせーな」

少しの間沈黙が流れる。

ハル「いいんじゃないね、嫌われても」

美咲、ハルを見る。

ハル「これから何十何百って人に会っていくだろ。その中の1人でも自分のことを好きって言ってくれる人がいれば、それで十分だろ」

美咲「たった1人？」

ハル「みんなに好かれようとしても疲れるだけだろ。たった1人でいい。美咲がいることでその人が救われる。そんな人になって

ほしい」

美咲「・・・なれるかな、私も」

ハル「もうなってる」

美咲、ハルを見る。

ハル「ここを離れても、美咲を必要とする人は必ずいる」

美咲「・・・ハル」

ハル「何？」

美咲「私も誰かを救えるような人になる。そしてたらまた会いに来るから」

ハル「じゃあ約束な」

ハル、美咲の前に小指を出す。

美咲「うん」

美咲、ハルと指切りする。

○同・境内（夜）

美咲、賽銭箱の隣に座っている。

ハルの声「よう」

美咲、顔を上げるとハルが立っている。

○池田家・リビング（夜）

香織、ソファに座っている。

綾香と優作、入ってくる。

優作「見つかっちゃって？」

香織「ふみさんの家にいる」

綾香「ハルが見つけたんだね」

優作と綾香、座る。

優作「父親失格だよ。美咲にはずっと負い目を感じてたんだ。自分のせいで苦労かけてきたから。だから美咲が学校で何かあっても強く言えなかった。ずっと美咲が壁を作ってると思ってたけど、作ってたのは僕の方だった」

綾香「あんたはさ、何でもかんでも背負おうとし過ぎだよ。あの子の分まで背負おうとしてるでしょ。自分が持てる分だけでいいの。残りは美咲や香織に背負わせていいんだから。それが家族でしょ」

香織「私も美咲もあんまり背負えないけど、持てない分は3人で持とう」

優作「うん」

○一ノ瀬家・ハルの部屋（夜）

部屋に月明かりが差し込んでいる。

美咲とハル、座っている。

美咲「誰かを変えられる人になりたかった。私
みたいな人が、前に進むきっかけを作れる
ように。でも出来なかった」

ハル「・・・」

美咲「中学の時、いじめられてた子がいたの。
その子のこと助けてあげたかったけど、ど
うしていいか分からなかったの。その後、
その子を学校で見るとはなくなった。何
も出来ない自分がふがいなくて、変われな
い自分が悔しかった。だから次は何をして
でも救おうと思ったの。私が強くなれば、
誰も傷つかなくて済むから。負けないよう
に強い言葉吐いて、それで喧嘩になって、
でもその後には何も残らない。自分が分か
らなくなっていくだけ」

ハル「・・・」

美咲「今の学校でもいじめられてる子がいるの。その子に居場所を作ってあげたかった。でも無理だった。今の私じゃ、理想には届かない・・・ほんとはね、ハルみたいになりたかったの。ずっとハルが眩しかった」

ハル、美咲を見る。

美咲「知ってた？向日葵は成長すると太陽を追いかけてなくなるの。太陽まで伸びようとしたけど、無理だったことに気付いたんだと思う」

ハル「違うよ」

美咲、ハルを見る。

ハル「本当に大切なことが何か、それに気付いたんだよ。空の高さがすべてだった。でも周りを見て世界の広さを知った。色んな生き方があることを知って、自分は自分で良いんだって分かったんだよ」

美咲「・・・」

ハル「大事なのは道を作ってあげること。き

つとその人は歩ける場所が無いんだと思う。
美咲は美咲らしく生きていけばいい。それが道しるべになるから。きっとその先に、他の誰かを救える場所があるんだと思う」

美咲「・・・」

ハル「美咲には人を思いやれる優しさがある。

自分の弱さを受け入れられる強さがある。

良い所も悪い所も、全部含めて美咲だろ。

ないものばかり見なくていいんだよ。あ

とはその強さをどう使うか」

美咲「・・・やっと言ってくれた」

ハル「え？」

美咲「何でもない」

ハル「何だよ」

美咲「大人になったね」

ハル「美咲はまだ子供だな」

美咲「うるさい」

2人、笑いあう。

○同・居間（夜）

香織、優作、綾香、ふみ、加奈が座つて待っている。

ハルと美咲、入ってくる。

ハル「みんなどうしたの？」

優作「話し終わるの待ってたんだよ」

綾香「もういいの？」

ハル、美咲を見る。

美咲、頷く。

ハル「うん」

香織「お腹空いちゃったから早く帰ろ」

綾香「さつき夕飯食べたでしょ」

香織「またお腹空いたの」

美咲「ふふ」

優作、美咲の笑った顔を見て微笑む。

ふみ「少し作ってあげるから、食べてきな」

香織「ふみさーん」

香織、ふみに抱きつく。

ふみ「ちよっとよしな」

加奈「わたしもー」

加奈、ふみに抱きつく。

ふみ「だからよしなっ」

笑いあう一同。

○池田家・美咲の部屋（朝）

美咲、ベッドから起き上がる。

スマホを開き、昨日みんな撮った写真を眺める。

○同・家の前の道

美咲、香織、優作、車の前に立っている。向かいには綾香。

優作「ありがとね、姉さん」

香織「絶対また来るから」

綾香「今度はもっとマシなもの持ってきてね」

香織「ネーズはないよね」

綾香「マヨネーズのこと、ネーズって言わな

いで」

綾香、美咲を見る。

綾香「元気でね」

美咲「うん」

優作「じゃあ行くね」

車に乗り込む3人。

香織、乗車後に窓を開ける。

香織「じゃあね、綾香さん」

綾香「バイバイ」

走り出す車。

○一ノ瀬家・玄関前

加奈、シャボン玉で遊んでいる。

ふみ、加奈の遊んでいる姿を見ている。

そこに車がやって来て家の前で止まる。

車から美咲、香織、優作が降りてくる。

加奈「どうしたの？」

香織「お別れの挨拶」

加奈「もう帰っちゃうの？」

香織「もう少し居たかったんだけどね」

ふみ「ハル呼んでくるよ」

香織「お願い」

ふみ、玄関の扉を開ける。

ふみ「ハル！」

ハルの声「今行く」

ハル、家の中から出て来て美咲の前に
立つ。

ハル「よう」

美咲「よう」

ハル「今度は俺がそっちに行く」

美咲「ハルにはまだ東京は早いかな」

ハル「おい」

美咲「うそ、いつでも来て」

加奈「加奈も東京行く」

美咲「その時は案内してあげる」

加奈「東京で御曹司をゲットするの」

ハル「お前は留守番だな」

加奈「えー、やだ」

美咲「ハル」

ハル「ん？」

美咲「ありがとう」

ハル「何が？」

美咲「色々」

ハル「何かしたっけ」

美咲 「分かれバカ」

ハル 「バカって何だよ」

美咲 「バカだからバカって言ったの」

ハル 「バカって言う方がバカだからな」

美咲 「ハルよりはバカじゃない」

ハル 「俺より美咲の方がバカだろ」

美咲 「何よバカハル」

ハル 「誰がバカだよ」

加奈 「どっちもバカだよ」

香織と優作、顔を見合わせて笑う。

優作 「行こっか」

美咲 「うん」

香織 「元気でね」

ふみ 「あんたもね」

香織と優作、車に乗る。

美咲、車に乗る前に振り返り、ハルを見る。

美咲 「ありがとう」

ハル 「おう」

美咲、車に乗る。

香織、窓を開け

香織「じゃあね」

と言うと、車が走り出す。

ハル、去って行く車を見ている。

○貝塚高校・校門（朝）

生徒たちが登校している。

○同・2年2組

生徒たちが鈴木の話を知っている。

鈴木「夏休みも明けて、少し気が緩んでると

思うが・・・」

美咲、渡辺の席を見ると渡辺の姿はない。

鈴木「来年から受験が始まる。まだ先だから
って思っているとすぐに来るからな。今から
しっかりと準備を・・・」

後ろの扉が開き渡辺が入ってくる。

渡辺「遅れてすいません」

渡辺、自分の席に着く。

大橋「(ぼそっと) 一生来なければいいのに」

美咲、大橋を見る。

鈴木「えーっと・何だっけ」

生徒たちが笑う。

美咲、渡辺を見てる。

○同・トイレ前

渡辺、トイレから出てくると美咲がドアの前で立っている。

美咲「来ないかと思った」

渡辺「迷ったんだけど、もう少し頑張ってみようと思う。来年は受験があるし、そして少しは良くなるかもって。松岡さんが標的にならないようになんとかする。初めて私を守ってくれた人だから」

渡辺、立ち去る。

美咲「来てくれてありがとう」

渡辺、振り返る。

美咲「もう一度私にチャンスをくれた。辛かったり苦しかったら隣にいる。だから・・

1人だなんて絶対思わないで」

渡辺「・・・ありがとう。でも無理しないで。

私1人でなんとかするから」

渡辺、去って行く、

美咲、渡辺の後姿を見ている。

○同・2年2組

生徒たちが帰る準備をしている。

美咲、渡辺を見ている。

立ち上がり帰ろうとすると、大橋が大

声で笑い始める。

大橋「マジやばくない！てかそれ、ちよーウ
ケるんですけど」

大橋、帰ろうとしている渡辺を見つけ
ると

大橋「渡辺さん」

渡辺、立ち止まる。

大橋、中野、井上が渡辺に近づいて行
く。

大橋「腕が痛くてー、鞆が持てないの。だか

ら・・駅まで持って！」

渡辺「・・・」

大橋「聞こえてますかー」

渡辺「・・・」

大橋「持って」

大橋、渡辺に鞆を突き出す。

渡辺、大橋の鞆を持とうとすると、美

咲が鞆を掴み大橋に突き返す。

美咲「いいよ、持たなくて」

大橋「いちいち人のやることにいちやもんつ

けんなよ」

美咲「何があっても絶対守る。どこにも居場

所がないなら私が作る」

渡辺、美咲を見てる。

美咲「この子はね、自分が休んだら他の子が
いじめられるから、辛いはずなのにそれで
も学校来てるんだよ。自分が1番苦しいの
に、それでも私のことなんか心配してる」

他の生徒たちが美咲を見ている。

美咲「ここは誰にでも平等に居場所がある。

みんな自分の居場所を見つけるために必死なんだよ。そんな大切なものをあんたが奪っていい権利なんかない。私はこの子が笑っていられるように、苦しくても弱音を吐きだせるように、何が何でもこの場所を守る」

大橋「何よえらそーに。そんなに言うなら、明日からあんたのこといじめ倒してやるから。私にたてついたこと、後悔させ・・・」
渡辺、美咲の前に出る。

渡辺「そんなことはさせない。松岡さんの居場所は私が守る。もう絶対に負けない」

美咲、渡辺を見ている。

大橋「じゃあまずはおんたから・・・」

内藤がやって来る。

内藤「ごめん渡辺。ずっと見て見ぬふりしてた。関わったら面倒だし、自分に関係ないとか思ってた。ほんとごめん」

沢田も来る。

沢田「私も一緒。ずっと怖かったの。次は自

分かもしれないって。だから渡辺さんがいじめられてるのを見て安心してた。本当にごめんなさい」

渡辺「・・・」

美咲「こんなことばかりやってたら、誰からも信用されなくなるよ。あんたが困った時、助けてくれる人いる？」

大橋「何であんたにそんなこと言われないういけないの。私にはちゃんといえるから。ね？」

大橋、中野と井上を見る。

中野「・・・うん」

大橋「ちよっと、今の間は何？」

中野「急に聞いてくるから、ね？」

井上「うん」

大橋「私が困ったら助けてくれるよね？」

2人、黙り込む。

大橋、2人に詰め寄り

大橋「何で黙るの？この間ジュース奢ったよね」

美咲「行こ」

美咲と渡辺、教室を出て行く。

大橋「ねえ、黙ってないで何か言ってよ」

中野「私たちこの後、約束があるから」

井上「そうだね。行こっか」

中野と井上、教室から出て行く。

大橋「待ちなさいよ。もー、どいつもこいつもムカつく」

○同・校門

美咲と渡辺、歩いてくる。

美咲、校門を出ると立ち止まる。

美咲「私こっちだから」

美咲、歩き出す。

渡辺「松岡さん」

美咲、振り返る。

渡辺「ありがとう」

美咲「・・・うん」

渡辺「今まで自分の気持ち言えなくて、言えないなら我慢するしかないって思ってた。でも変われそうな気がする。私も松岡さん

みたいになれるかな」

美咲、渡辺を見る。

渡辺「学校に来られなくなった子がいるって
言ったでしょ。今度その子の家に行こうと
思う。松岡さんが私の居場所を作ってくれ
たように、私もその子の居場所を作ってあげ
たい。いつかまた、笑って歩けるように」

美咲「その時は私も一緒に行く」

渡辺「ありがとう。それと・・連絡先交換し
てほしいなって」

美咲、自分を指す。

渡辺「うん」

美咲「いいよ」

渡辺「ありがとう！」

スマホを取り出し連絡先を交換する。

渡辺「たまに連絡してもいい？」

美咲「うん」

渡辺「じゃあ今度連絡するね！また明日」

渡辺、手を振って立ち去る。

美咲、渡辺の後姿を見ている。

ふと空を見上げると青空が広がっている。

美咲 M 「ねえハル、私変わったかな。理想の自分とは違うけど、今の自分でもいいかなって思えるの。少しだけ自分が好きになれた気がする。でもね、私にとってはずっと変わらない。いつか思い出の向日葵のように」